

看護職部門

内館牧子賞

坊主頭とドライヤー

【広島県】 佐々木 淳子 ささき じゅんこ 52歳

49歳の秋、乳がんが発覚した。1年前の乳がん検診では異常はなかったが、この年の検診で乳がんの告知を受けた。最初の検査の段階では、初期なので乳房を全摘したら大丈夫とのことだったが、精密検査を受けるとリンパ節に転移があることが分かった。まず抗がん剤治療、手術、放射線治療と約1年にわたって計画された。看護師である私は、家族に心配を掛けたくないという思いでなかなかがんになったことを言い出せなかった。

この年に次男は看護大学を卒業し、化学療法を受ける患者さんを多く受け入れている病棟に就職していた。高校の進路決定時「看護師になるうと思っ」と突然、打ち

明けられた。少し驚いたが同じ看護職を選んだことにうれしさも感じた。「厳しい職業だけど、やりがある仕事だ」と助言した。

そんな次男に、「乳がんになったわ。リンパ節に転移しているので抗がん剤治療をせんといけん」と軽く打ち明けた。「えっ、そうなん」とかなり驚いていた。私はすぐに「大丈夫、大丈夫。なったものは仕方ない。治療をしっかり受けるわ。仕事はしばらく休ませてもらうことになったよ」と気丈に振る舞ったが会話はそれ以上続かなかった。

治療開始まで私は髪の毛を短く切ったり、ウィッグを用意したりそれなりの覚悟をしていた。帰宅したある日、坊主頭の次男がいた。

高校では野球部で坊主頭だったが、大学に入り流行の髪型で朝も仕事前にセットしたりしていたのに。次男の気持ちが手に取るようになって涙があふれそうになった。涙をこらえ、「どうしたん、びっくりした。でも似合うね。高校の時に戻ったみたい」と言う。「暑いし、髪セットするのも大変じゃったけん」とさりげなく言った。

次男は、その冬のボーナスでとびきりいいドライヤーを買ってきてくれた。髪の毛が抜けて坊主頭で必要ないけど、いつかこのドライヤーを使いたい。使える日が来るのか。

あれから2年、私は毎日このドライヤーを使える喜びをかみしめている。